

北海道の外来鳥類とペット販売

－カササギの定着は稀な例外か－

早矢仕 有 子

はじめに

I. ペット販売店調査

1. 調査方法
2. 札幌市で販売されている鳥類種
3. 野生化の可能性
4. 法規制の変化

II. 北海道におけるカササギの定着

1. なぜ北海道にカササギがいるのか
2. カササギへの市民感情
3. 外来鳥管理と北海道のカササギ

III. 謝辞

IV. 引用文献

はじめに

人為的活動により本来の生息域を越えて移動した生物を「外来生物」と呼ぶ。この定義の中には、国境を越えて侵入した海外起源の外来種とともに、日本国内のある地域から、本来の生息域外へ持ち込まれた国内外来種も含まれる。人間の移動や物流が盛んになるにつれ、意図の有無に関わらず、生物の人為的移動も増加し、それに伴い外来生物の自然界への逸出が相次いでいる。逃げ出した個体が自然界で生存し繁殖に成功する確率は低いだろうが、中には子孫を残す幸運な個体が存在し、新たな分布域を築くこともある。日本に生息する外国起源の生物種数は、把握されているだけでも2,000種におよぶ。これら外来生物は、捕食や競争・交雑により在来の生態系に悪影響を及ぼしたり、感染症の伝播等により人の健康を害したり、農林水産業へ被害を与える場合もある（環境省自然環境局「外来生物法」<http://www.env.go.jp/nature/intro/1outline/basic.html#basic1>, 2015年2月5日参照）。

鳥類に関しては、43種の「外来鳥（外来生物のうち鳥類の呼称）」が日本で定着し繁殖していることが確認されており、そのう

ち38種は観賞目的で持ち込まれた (Eguchi and Amano 2004)。観賞目的の中には、コブハクチョウのように公開の場で放飼いになれる例もあるが、大半は、ペットとしての流通が盛んなインコ科、スズメ科、ムクドリ科の種であることから、飼育されていたペットの偶発的な逸出が日本における外来鳥定着の主因であると考えられる (Eguchi and Amano 2004)。私たちは経験的に、これら多くの鳥たちがペット販売店で売られていることを知っているが、地域ごとの正確な実情はほとんど把握されていない。

北海道で定着が確認されている外来鳥は4種で、そのうち、観賞を目的に持ち込まれたのはコブハクチョウ一種である (北海道環境生活部環境局 2010)。コブハクチョウは1975年に七飯町大沼国定公園に放されたつがいが増殖し、そこからウトナイ湖等へ分布を拡大している (北海道環境生活部環境局 2010)。他3種のうち2種 (コウライキジとヤマドリ) は狩猟目的で放鳥された個体が野生下で繁殖に至り定着している。コウライキジの原産は朝鮮半島と中国東北部、北海道への導入は1930年に遡り、現在では道央・道南を中心に広く分布している (北海道環境生活部環境局 2010)。ヤマドリは本州・四国・九州に生息する日本固有種であるが、北海道には本来分布しておらず、1974年～1987年の北海道猟友会による放鳥個体が生残し世代交代しているようだ (北海道環境生活部環境局 2010)。もう1種、都市部で普通に見られるドバトも外来鳥だが、北海道への導入時期は不明で、日本への移入は、大和・飛鳥時代までさかのぼると考えられている (北海道環境生活部環境局 2010)。このように、今のところ、北海道に定着している外来鳥は少数種にとどまり、ペット由来の外来鳥定着は確認されていない。

しかし一方、北海道に自然分布していなかったカササギが、近年、北海道西部の胆振地方に定着し勢力を強めている。人為的に導入された外来種か自然に渡来したのか由来が不明であるが、北海道で継続的に姿が見られるようになったのは1990年代からであり、1993年以降、室蘭市・登別市・白老町で営巣も観察されるように

なった（樋口 2003, 堀本 2004）。現在は苫小牧市を中心に個体数を増加させている。

カササギは日本では佐賀県を中心とした九州北部に分布が集中しており、佐賀県の鳥に選ばれ、生息地は国の天然記念物に指定されているが、日本の在来種ではない。その起源は、16世紀末から17世紀初頭頃に朝鮮半島から人為的にもたらされた可能性が最も高く（江口・久保 1992）、豊臣秀吉の「朝鮮の役」のときに連れて来られたという通説が佐賀を中心に広まっている。

本論文ではまず、札幌市内のペット販売店で販売されている鳥類種とその10年間の動向を明らかにし、それら販売種が、外来鳥として北海道に定着する危険性を検討する。さらに、新規侵入種であるカササギへの住民意識や関心にも注目し、外来生物管理の在り方を考察する。

I. ペット販売店調査

1. 調査方法

札幌市内で販売されている動物種を把握することを目的として、2004年5～9月、2007年7～9月、2014年7～9月にペット販売店を訪問し、販売されている生体の種名を記録し、店舗の許可が得られた場合は写真撮影も実施した。年ごとの各店舗への訪問回数は1回とした。調査に先立ち、札幌市内の主要ペット販売店に電話およびファクシミリにて調査協力を依頼し、協力を得られた店舗を対象に、札幌大学法学部演習Ⅰの履修生と現地調査を実施した。各年の調査者と調査店舗数は以下のとおりである。2004年は、東伶、池内潤樹、佐藤淳貴、佐藤拓、菅原彰浩、都筑慎一、羽山佳、福島昂大、星光太郎、本間大志、南太史、宮田英士、山崎丈弘の13名で18店を調査した。2007年は、斗内悠貴、青野寛生、阿波祐司、大浦典、堀秀行、三木一徳の6名が参加し、14店を調査した。2014年は、齋藤康輔、原田楓太、光好君騎、石岡賢太郎、落合智美、荒閑

寧々、坂本大地、菅原勇人、森本圭一の9名で9店を調査した。調査歴のある販売店の一部閉店に伴い、2014年の調査店舗数は前の2年より減少した。

調査はイヌネコ以外の全動物種を対象とし記録したが、ここでは鳥類の結果について述べる。

2. 札幌市で販売されている鳥類種

3年間の調査で販売が確認された全鳥種の種名と年ごとの販売店数、原産地の一覧を表1に掲載した。各鳥種の種名(和名と学名)と各種の属する科・目および原産地は、del Hoyo & Collar (2014)、日本鳥学会 (2012) および山階 (1986) に準拠し、例外は表末尾に記した。店頭で生体に表示されている種類名は、飼育業者の通称や品種名であることも多いが、その場合は、学名に対応した標準和名に統一した。たとえばシロジュウシマツ、ボンテンジュウシマツ、ジュウシマツはそれぞれ別名が表示され販売されていたが、これらはいずれも和名「コシジロキンバラ」(学名 *Lonchura striata*) の名を持つ野生種から人為改良により作られた品種であることから、「コシジロキンバラ」に統一した。同様に、2004年に販売されていたクロウコッケイは「ニワトリ」、2014年に販売されていた「コールダック」は「アヒル」と表記した。ニワトリの原種は東南アジア原産のセイキショクヤケイ (*Gallus gallus*)、アヒルは日本を含む北半球中緯度地帯に広く分布するマガモ (*Anas platyrhynchos*) から改良された品種であり、ともに家禽で野生個体の原産地は存在しないため、原産地には「家禽」と書き入れた。また、「チョウゲンボウ」「ウズラ」「メジロ」と表示された個体については、それぞれハヤブサ属、ウズラ属、メジロ属のどの種か特定できなかったため、種数には数えず、表中では「〇〇属の1種」と表記した。ほかに表示名と写真から種を特定できなかった個体は、表に掲載しなかった。

2004年に訪れた17店のうち、鳥類を販売していた店舗は11店で、

販売されていた鳥種数は54種、2007年は14店中9店に43種が販売されており、2014年は9店中8店に34種が販売されていた。3年間の調査で合計78種の鳥類を記録した。分類群ごとに見ると、全販売種数の半数以上の47種をインコ目が占め、ペットとしての人気の高さを伺わせた。年ごとに比較すると、2004年は販売種数中57.4%（31種）、2007年はもっとも比率が高く72.1%（31種）、2014年は58.8%（20種）を占めていた。インコ目（オウム目とも呼ぶ）の中では、オウム科のオカメインコ、インコ科のヨウム、サザナミインコ、マメルリハインコ、コガネメキシコインコ、ルリコンゴウインコ、セキセイインコ、コザクラインコ、ボタンインコ、ホンセイインコの10種が3年間共に記録された。そのうちオカメインコ、サザナミインコ、セキセイインコとボタンインコはどの年にも複数店舗で販売されていた。インコ目に続いて販売種数が多かったのはスズメ目で、3年間で20種の販売を確認した。このうち、カナリアとキンカチョウ、コキンチョウ、ジュウシマツ（コシジロキンバラ）、ブンチョウ、キュウカンチョウの6種は3年間共に販売されており、その中でカナリア、ジュウシマツ、ブンチョウ、キュウカンチョウはいずれの年にも複数店舗で販売されていた。スズメ目の中で販売種数が多かったのはカエデチョウ科の12種で、3年間の調査全年で販売されていたスズメ目6種のうちカナリア（アトリ科）を除く5種はこの科に属する。

3. 野生化の可能性

Eguchi & Amano（2004）、川上（2012）、国立環境研究所「侵入生物データベース（<http://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/>）」に基づき、全販売種から日本で野生化し繁殖・定着している種を抽出すると、カモ科のアヒル、インコ科のセキセイインコ、ホンセイインコ、ダルマインコ、オキナインコ、カエデチョウ科のホウコウチョウ、カエデチョウ、ベニスズメ、ブンチョウ、テンニンチョウ科のホウオウジャクの9種が挙げられる。各種の原

産地と日本国内での生息状況を比較すると、セキセイインコはオーストラリア原産で日本では新潟以南の都府県で野生化している。ホンセイインコのうち販売されていた亜種ワカケホンセイインコは南アジア（インド・パキスタン・スリランカ）に分布し、日本では現在、関東地方を中心に定着・繁殖している。ダルマインコは南アジア・東南アジアに分布し、日本では東京及び周辺で野生化し繁殖している。オキナインコは南米原産で国内では神奈川県・三重県で生息が確認されている。アフリカ原産のホウコウチョウは東京・埼玉で、同じくアフリカ原産のカエデチョウは東京・大阪・埼玉、ベニスズメは南アジアから東南アジアに分布し、日本では新潟以南各地で繁殖記録がある。ブンチョウはジャワ・バリ島原産で、宮城以南の主に近畿地方で繁殖記録がある。ホウオウジャクはアフリカ原産で、東京・神奈川・兵庫で生息記録がある。また、アヒルの原種マガモは北半球中緯度に広く分布し、野生化したアヒルとマガモの交雑が日本各地で発生しているが、販売されていたコールダックはアヒルを4分の1ほど小型に改良した品種であり、野生化の可能性は不明である。

このように、札幌市で販売されていた鳥類種のうち日本国内で野生化が確認されている種は、アヒルを除くと熱帯から亜熱帯を原産地としているため、北海道で飼育下から逃げ出しても、長期の生存に成功する可能性は低いであろう。

それでは、日本で定着が未確認の他の販売種が北海道で定着する可能性は無いのだろうか。

本調査で販売が記録された鳥類種を分類群ごとに原産地で区分すると、キジ目キジ科はインドと東南アジア、アメリカ西部が1種ずつ、ハト科はアフリカとオーストラリア各1種、インコ目オウム科の3種はオーストラリア、インコ科はアフリカ8種、オーストラリア6種、南アジア1種、東南アジア3種、中国南部1種、中央アメリカ7種、南米16種、中南米1種であり、もし飼育下から逃げ出しても北海道の気候に適應できる可能性は低いといえるだろう。イン

コ科で唯一アオハシインコだけがニュージーランドの島嶼に分布し、比較的冷涼な島に生息する亜種も存在する。また、アメリカ西部原産のキジ科カンムリウズラ属のカンムリウズラも定着成功の可能性はあるかもしれない。タカ目では、ハヤブサ科のラナーハヤブサの分布はヨーロッパ南部からアフリカであり、北海道は生息適地とは言えない。タカ科のモモアカノスリの実地はアメリカ合衆国南部から南米大陸であるため、逸出しても北海道で定着する可能性は高くないと推察されるが、これら飛翔力の高い猛禽類は、生息適地まで移動する可能性も捨てきれない。「チョウゲンボウ」と表記されていたハヤブサ属の1種は、同種あるいは近縁種が北海道にも在来種として生息しており、逸出時には競合あるいは交雑の危険性がある。タカ科の中で多数輸入されている外国産オオタカでは、飼育からの逸出個体が確認されており、在来オオタカ亜種との交雑が危惧されている（遠藤 2009）。

フクロウ目メンフクロウ科のメンフクロウは、北はスコットランド、デンマークからヨーロッパの大部分、アフリカ、南アジア、オーストラリア、南北アメリカ大陸等、世界の広域に分布している。温暖な地域が分布の中心ではあるが、寒冷地にも生息しているため、北海道でも生存可能性は高いと考えられる。また、牧草地や畑地は彼らにとって、主食である小型哺乳類の狩りに適している。したがって、販売が確認された鳥類種の中で北海道での定着に成功する可能性がもっとも高いのは、メンフクロウかもしれない。飼育下で生まれ育った捕食者が野外で生存する可能性はきわめて低いだろうが、定着可能性は否定できない。フクロウ目やタカ目の飼育個体の逸出を防除する必要性は高いだろう。

さらに、スズメ目の販売種の中で、ヤマガラとウソは北海道にも生息する在来種である。販売個体の由来は不明であるが、一旦野外に逸出すれば、北海道個体群と交雑することもあるだろう。また、種名が特定できなかったウズラ属とメジロ属は在来種と同種か近縁種であるため、在来種との競合、もしくは交雑による遺伝的

攪乱を引き起こす恐れがある。メジロは鳴き声がよく容姿が愛らしいため、日本国内で愛玩用にもっとも多く飼われている野鳥である（茂田 2008）。外国産だけではなく多くの日本産個体が国内で違法に捕獲され、輸入されたものとして飼養されており、近年輸入実績のない韓国産と称するメジロが日本国内で販売される事例があることから（環境省自然環境局野生生物課鳥獣保護業務室 2013）、そもそも合法性が疑われる恐れすらあるようだ。

4. 法規制の変化

2004年に調査を開始した後、鳥類のペット販売を巡る法制度にも変化があった。

まず、2005年6月に「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（外来生物法）」が施行された。この法では、海外起源の外来生物種の中で生態系、人の生命・身体、農林水産業へ被害を及ぼすもの、又は及ぼすおそれがあるものの中から特定外来生物を指定し、その被害を防除することを目的としている（環境省自然環境局「外来生物法」<http://www.env.go.jp/nature/intro/index.html>）。2014年8月時点で特定外来生物に指定されている鳥類は5種に過ぎないが、そのうち4種（ガビチョウ、カオジロガビチョウ、カオグロガビチョウ、ソウシチョウ）は、ペットとして日本に持ち込まれ野生化した種である。特定外来生物に指定された5種の鳥類に関しては、原則的に輸入・販売・飼育・運搬・放鳥等が禁止されている。

厚生労働省は、輸入動物を原因とする人の感染症発生を防ぐ目的で、2005年9月より「動物の輸入届出制度」を導入し、哺乳類および鳥類を輸入する際には種の一覧と個体数等の厚生労働大臣への届出を義務づけた。さらに、高病原性鳥インフルエンザ発生国からの生体の輸入は原則禁止された。これにより、とくに、アジア諸国からの鳥類輸入が困難になった。日本に定着している外来鳥には気候や植生が似た中国原産の種が多いため（川上 2012）、中国や韓国

など近隣国からの輸入が停止したことは、新たな外来鳥発生リスクを低下させる効果もあったと言えるだろう。一方、ペットとして人気の高い種の輸入が困難になると、輸入が許可されている国から近縁種や亜種の輸入が増加するかもしれない。たとえば、2014年に販売されていたメジロ2種がいずれもアフリカ原産種だったことは、禁輸措置の無いアフリカ産への輸入対象の移行を象徴していると考えられる。

また、2012年9月の「動物の愛護及び管理に関する法律（動物愛護法）」改正により、動物の対面販売が義務づけられ、インターネット販売による遠隔地からの購入が原則不可になった。

国内での野生個体捕獲については、許可無しの捕獲と飼養はそもそも「鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律（鳥獣保護法）」で禁じられているが、愛玩飼養目的の捕獲許可対象種は1979年以降減少し続け、2011年9月の「鳥獣の保護を図るための事業を実施するための基本的な指針」の改正において、愛玩飼養目的の捕獲は原則として許可しないことが明記された（環境省「野生鳥獣の保護管理『愛玩飼養・鳥獣等の輸入規制』」<http://www.env.go.jp/nature/choju/effort/effort3/>, 2015年2月5日参照）。

このように鳥類を含むペット動物の流通と販売については規制が強まる傾向にある。本調査において、2014年に販売されていた鳥類種数が2004年、2007年に比べて減少していたのは、これら法規制の強化とも関係があるだろう。事実、生きた鳥の輸入数は減少しており、2006年に年間109,821羽だった輸入個体数が、2013年には年間24,287羽に減少している（厚生労働省「動物の輸入届出制度について『我が国の動物の輸入状況について』」<http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000069864.html>）, 2015年2月5日参照）。ペットとして人気のインコ目はその7年間に28,871羽から5,856羽と約5分の1に、スズメ目は70,424羽から12,624羽へと8割以上減少した。他の「目」も概ね減少しているが、タカ目の輸入数は大きな差異が認められない。そして唯一クロウ目だけが、

2006年の256羽から2013年の871羽へと3倍以上に輸入数を伸ばしている。2001～2011年に公開された「ハリー・ポッター シリーズ」に始まったフクロウ人気は、都市部を中心にフクロウ・カフェを生み、ペットとしての人気度も上昇させていることが推測される。輸入個体数はまだインコ目等に比べても少ないが、増加傾向が今後も続けば、いずれ肩を並べるかもしれない。

Ⅱ．北海道におけるカササギの定着

1．なぜ北海道にカササギがいるのか

本調査において、札幌市内のペット販売店にカササギの販売は確認されなかった。関東地方等で散発的に目撃されるカササギは飼育個体逸出の可能性が指摘されることもあるが、情報の真偽は不明である。少なくとも北海道で定着しているカササギの由来が北海道内の飼育個体と考える根拠は認められず、周辺の生息地である朝鮮半島あるいはロシア沿海地方等から飛来した可能性もある。だとするとカササギは外来鳥ではない。

別の可能性を示す興味深い資料がある。1996年、新潟県南部の姫川港でロシアの貨物船のハッチから10羽のカササギが飛び出した目撃記録があり、その後県内で数年間の繁殖記録が残されている（鷲澤 2008）。北海道での主な生息情報が苫小牧や室蘭の港湾都市であることから、新潟県と同様の経緯で偶発的に航海した個体が居着いたのかもしれない。

江口・久保（1992）は、九州における散発的な目撃例の多くは大陸からの迷行個体であると推察した上で、鳥など比較的少産の動物は数個体を放飼するだけでは定着増殖するには不十分で、積極的な繁殖、保護がなされて初めて可能であり、佐嘉藩では藩祖がもたらしたカササギを増殖のため保護を加えた結果、増殖に成功したと指摘している。胆振地方で増加しているカササギは特段人為的な保護を受けたわけではないが、今のところ増殖に成功している。他の多

くの外来鳥類同様、人為的に改変された環境に適応することで、直接的保護ではないものの、ヒトからの恩恵を受けているのかもしれない。

苫小牧市ウトナイ湖野生鳥獣保護センターでは、来館者からカササギの目撃情報を集めているが、そこには、カササギがヒトの生活圏で巧みに暮らしている様子が多数書き込まれている。2008年秋から2011年春に書き込まれた情報381件から、目撃時のカササギの行動を拾い出してみた。すると、繁殖期に営巣行動を目撃した情報が19件あり、そのうち営巣場所の記述があった13件の内訳は、「電柱」4件、「送電線鉄塔」2件、「小学校」2件、「鉄橋」、「人家のテレビアンテナ」、「公園の木」、「庭木」、「ショッピングセンター」が各1件で、すなわち、すべてが工作物か植栽であった。営巣以外の目撃地点は、「庭」22件、「電線（電柱）」20件、「公園」16件、「道路（車道・歩道・中央分離帯）」12件、「工場」6件、「校庭」と「空地」、「駐車場」各4件、「人家の屋根」3件、「TVアンテナ」「畑」「柵」各2件、などであった。特徴的な行動に関する記述は、「飼い犬の餌を食べに来る」が5件、「餌台等庭の餌付けに来る」3件、「近くを車が走っても気にしない」2件、「人が近づいても逃げない」2件、「飼い犬の毛をくわえて運んでいた」、「飼いネコを攻撃しようとする」、「スーパーのゴミ箱をあさっていた」各1件で、ヒトや飼い犬・飼い猫との関係が目立つ。他の鳥との関係では、「カラスに追われていた」3件、「カラスを追っていた」1件、「カラスと喧嘩していた」1件、「カラスと遊んでいた」1件、「家で飼っている犬の餌をカラスと共に食べに来る」1件、「スズメに追われていた」1件、「スズメを追い払った」1件であった。

全381件の目撃情報のうち、種の判定が曖昧なものや場所の記載が無いもの、北海道外の目撃情報件を除いた376件の目撃場所は、苫小牧市が9割を占め340件、白老町6件、千歳市、室蘭市、鶴川町が5件ずつ、札幌市4件、登別市と安平町が3件ずつ、江別市、

恵庭市、北広島市、穂別町、滝川市各1件、であった。苫小牧市内の施設来訪者からの情報なので、目撃が苫小牧市に偏るのは当然だろうが、それでもカササギの分布が苫小牧市に集中している実態を反映した結果といえる。

佐賀県のカササギは、電柱を営巣場所を選ぶことで、宅地開発を味方に個体数増加と分布拡大に成功した可能性を、Eguch & Takeishi (1997) は指摘している。苫小牧のカササギも、営巣場所や食料を住宅地で確保し、ライバルのカラスやスズメと争い、人為環境を逞しく利用しながら定着の足固めをしてきた様子が、市民の情報から伺われる。

2. カササギへの市民感情

この目撃情報に記されたコメントには、カササギへの市民感情も反映されている。「美しい瑠璃色の羽が印象的」、「とてもかわいらしい鳥でした」、「色がきれい。かわいい」、「しっぽがきれいでした」、「かわいかった」、「かっこいい鳥だと思いました」、「黒白できれいでした」、「白と黒のバランスがステキな鳥」、「見た目ステキ」「姿がいい」と、カササギの容姿を愛でる声が10件、鳴き声に関するコメントは多いが、その中で「鳴き声がかわいい」と、声を肯定的に受け止めたコメントが1件、「毎日うるさく鳴いています」と声を幾分否定的に捕らえたものが3件あった。ほかに、「写真に撮った うれしい!」と喜びのコメント1件、カラスへの攻撃姿勢を「凶暴」と評したものが1件、「低く飛んだりしてこわい」というものが1件あった。バードウォッチャーの来訪も多い施設での記入なので、鳥に対して好意を持っている人が多く標準的な市民感情と同一視はできないが、総体的にはカササギへの肯定的なコメントが否定的コメントを上回っていた。

この書面での情報収集とは別に、筆者がカササギを観察しながら住民の方から聞き取った話も印象的であった。そのひとつ、2013年に恵庭市の運輸会社内の大木に営巣し繁殖したカササギについて、

前年から2年続けて繁殖していると教えてくれた従業員は、「巢は何度も何度もカラスに攻撃されているが、その都度激しく反撃してカラスを追い払って負けることがない。たくましい鳥だ。」と感心していた。また、2014年に白老町で庭の餌台にカササギが飛来することを教えてくれた住民の方は、「カラスは他の鳥を襲ったり悪いことばかりするがカササギは可愛い。白黒の体はシャチみたいで優雅だ」と絶賛していた。

3. 外来鳥管理と北海道のカササギ

外来鳥による生態系やヒトの暮らしへの影響があまり明白でないこともあり、外来鳥への世間の関心は高まらない（Eguchi & Amano 2004）。ましてや、一旦定着してしまった外来鳥を排除することは技術的に難しいだけでなく、その必要性自体理解されづらい。たとえば、九州北部でカササギが分布を拡大している過程で、外来鳥だから駆除すべきとの声はほとんどあがらなかったという（Eguchi & Amano 2004）。

したがってなおさら、外来鳥による被害を未然に防止するためには、国外からの輸入を厳格に規制する必要がある（Eguchi & Amano 2004）。近年、とくに感染症発生防止を目的とし、生きた個体の輸入への規制が強まったが、許可を得て輸入された個体についても管理を強化すべきである。遠藤（2009）は、オオタカの密猟防止策として、標識（足環）あるいはマイクロチップによる個体登録の必要性を指摘しているが、標識による個体登録は、外来鳥防除策としても、輸入鳥類全種全個体および国内の飼育下で生産された全個体に適用すべきであろう。

しかし一方、北海道におけるカササギのような新規侵入種に対する住民の意識を把握する努力も必要ではないだろうか。少なくともここに紹介した限られた情報の範囲では、カササギへの好意的な声が目立っている。とくに、都市住民に評判の悪いカラスへの対抗姿勢は評価が高そうである。カササギは電柱等工作物にも営巣するこ

とから、市民生活に悪影響を与えることもあるのだが、まだ多くの住民にとっては無害な、むしろ愛すべき存在と受け入れられているようであった。今後、急激に勢力を増し、農作物等へ損害を与えるような状況にでもならない限り、とくに問題視されることなく、市民生活に溶け込んでいくのではないだろうか。カササギの分布と個体数の変化に伴う市民感情の変化を追跡することも、人類と鳥の関わりを知る上で興味深い課題であり、侵入種に対して何らかの積極的管理が必要になった際に、住民の意識がなおざりにされることがあってはならないし、管理政策に対する住民の理解を得る努力が必要である。

カササギの定着にどれほど偶然の幸運が働いたのか、解明することは難しい。現在、ペットとして北海道に持ち込まれている鳥種の中に同様の幸運者が現れるのか推測することも難しい。ただ、新規に侵入した鳥類種が社会に拒絶されづらい現状では、外来鳥防除のためには、輸入および国内移動も含め、個体の移動には慎重になるべきであり、少なくとも個体登録による管理を厳格化することは必須であろう。

Ⅲ．謝辞

販売動物種の調査を御快諾いただいた以下の販売店に厚くお礼申し上げます。アイランドやまがみ北野店・西野店、アトリエアクア月寒店、北郷ペット、きんぎょやKAZU、五番館SEIBUペットショップ、さっぽろ東急百貨店ペットコーナー、平木商店、ベッツリビン札幌店、ペットショップ小泉、ペットハウス陽鳥園札幌、ペットランド駅前エスタ店・清田店・ジャスコイオン平岡店・新発寒店・ファクトリー店・伏古店・ホームック北野通店、ホームック西岡店（五十音順：店舗名は調査当時のもの）。財団法人日本野鳥の会サンクチュアリ室ウトナイ湖サンクチュアリレンジャーの中村聡氏には、カササギに関する来館者からの情報をご提供いただいた。黒沢

令子博士（NPO法人バードリサーチ）には、新潟県のカササギに関する資料をご教示いただいた。

本研究の一部は、平成24年度札幌大学研究助成制度による研究成果である。

4. 引用文献

- del Hoyo, J. & Collar, N.J. (2014) HBW and BirdLife International Illustrated Checklist of the Birds of the World. Volume 1: Non-passerines. Lynx Edicions, Barcelona.
- Eguchi, K. & Amano, H.E. (2004) Spread of exotic birds in Japan. Ornithological Science. 3: 3-11.
- 江口和洋・久保浩洋（1992）日本産カササギ *Pica pica sericea* の由来 - 資料調査による. 山階鳥類研究所研究報告 24: 32-39.
- Eguchi, K. & Takeishi, M. (1997) The ecology of the Black-billed Magpie *Pica pica sericea* in Japan. Acta Ornithologica 32: 33-37.
- 遠藤孝一（2009）密猟との闘い・開発からの保全 - オオタカ（山岸哲[編著]：日本の希少鳥類を守る）pp. 183-199. 京都大学学術出版会, 京都.
- 川上和人（2012）外来鳥ハンドブック. 株式会社 文一総合出版, 東京.
- 環境省自然環境局野生生物課鳥獣保護業務室（2013）メジロ（*Zosterops japonicas*）識別マニュアル. <https://www.env.go.jp/nature/choju/effort/effort3/mejiro.pdf>, 2015年2月5日参照.
- 茂田良光（2008）世界のメジロ図譜 改訂版. 全国密猟対策連絡会. <http://www008.upp.so-net.ne.jp/mittairen/mejiro/mejirozufu.pdf>, 2015年2月5日参照.
- 樋口孝城（2003）野鳥情報と新聞報道 - カササギを例として-. 北海道野鳥だより 134: 8-9.
- 北海道環境生活部環境局（2010）北海道ブルーリスト2010 北海道外来種データベース. <http://bluelist.ies.hro.or.jp>, 2015年2月5日参照.
- 堀本富宏（2004）北海道胆振地方におけるカササギの記録. 山階鳥類研究所研究報告 36: 87-90.
- 日本鳥学会（2012）日本鳥類目録改訂第7版. 日本鳥学会, 三田.
- 山階芳麿（1986）世界鳥類と名辞典. 大学書林, 東京.
- 鷲澤澄雄（2008）「19. カササギの繁殖の歴史」（中村雅彦監修：上越鳥の会[編著]：雪国上越の鳥を見つめて）pp.83-85. 新潟日報事業者, 新潟市.

表 1. 札幌市内におけるペット販売鳥類種一覧

目 (Order)	科 (Family)	属 (Genus)	種和名 (Species)	種 (亜種) 学名 (Species/Subspecies)	販売店数 2004 2007 2014	原産地
キジ目 Galliformes	キジ科 Phasianidae	カンムリウズラ属	カンムリウズラ	<i>Callipepla californica</i>	1	合衆国西部
		ウズラ属	ウズラ属の 1 種	<i>Coturnix sp.</i>	2	インド
		ヒメウズラ属	ヒメウズラ	<i>Excalfactoria chinensis</i>	2	東南アジア
		ヤケイ属	ニワトリ	<i>Gallus gallus var. domesticus</i>	1	家禽
カモ目 Anseriformes	カモ科 Anatidae	マガモ属	アヒル	<i>Anas platyrhynchos var. domestica</i>	1	アフリカ
		キジバト属	アフリカジュズカケバト	<i>Streptopelia capicola</i>	2	オーストラリア
		チヨウシヨウバト属	ウスユキバト	<i>Geopelia cuneata</i>	1	オーストラリア
		モモイロインコ属	モモイロインコ	<i>Eolophus roseicapillus</i>	2	オーストラリア
インコ目 Psittaciformes	オウム科 Cacatuidae	オウム属	キバタン	<i>Cacatua galeria</i>	1	オーストラリア
		オカメインコ属	オカメインコ	<i>Nymphicus hollandicus</i>	4	オーストラリア
		ヨウム属	ヨウム	<i>Psittacus erithacus</i>	1	アフリカ
		ハネナガインコ属	ムラクモインコ	<i>Poicephalus meyeri</i>	1	アフリカ
インコ科 Psittacidae	インコ科 Psittacidae	ハネナガインコ属	クロクモインコ	<i>Poicephalus rueppellii</i>	1	アフリカ
		ハネナガインコ属	ネズミガシラハネナガインコ	<i>Poicephalus senegalus</i>	1	アフリカ
		ハネナガインコ属	サザナミインコ	<i>Bolborhynchus lineola</i>	3	中央アメリカ
		ハネナガインコ属	オキナインコ	<i>Myiopsitta monachus</i>	1	南米
インコ科 Psittacidae	インコ科 Psittacidae	ミドリインコ属	アマゾンミドリインコ	<i>Myiopsitta monachus</i>	1	南米
		アケボノインコ属	アケボノインコ	<i>Brotherus cyanoptera</i>	1	中央アメリカ
		アケボノインコ属	アケボノインコ	<i>Pionus menstruus</i>	1	南米
		アケボノインコ属	アケボノインコ	<i>Pionus maximiliani</i>	1	南米
インコ科 Psittacidae	インコ科 Psittacidae	ボウシインコ属	キホオボウシインコ	<i>Amazona autumnalis</i>	1	南米
		ボウシインコ属	アオボウシインコ	<i>Amazona aestiva</i>	1	南米
		ボウシインコ属	キビタイボウシインコ	<i>Amazona ochrocephala</i>	2	中央アメリカ
		ボウシインコ属	ムボウシインコ	<i>Amazona farinosa</i>	1	中央アメリカ
インコ科 Psittacidae	インコ科 Psittacidae	ルリハインコ属	アカボウシインコ	<i>Amazona rhodocorytha</i>	1	ブラジル
		ルリハインコ属	マメルリハインコ	<i>Forpus coelestis</i>	2	南米
		ルリハインコ属	ウロコメキシコインコ	<i>Pyrrhura frontalis</i>	1	南米
		ルリハインコ属	アカハラウロコインコ	<i>Pyrrhura rhodogaster</i>	2	南米

表 1. つづき

目 (Order)	科 (Family)	属 (Genus)	種和名 (Species)	種 (亜種) 学名 (Species/Subspecies)	販売店数		原産地
					2004	2007	
タカ目 Accipitriformes	タカ科 Accipitridae	メンフクロウ属	ホオミドリウロコインコ	<i>Pyrrhura molinae</i>	1		南米
			アカオウロコインコ	<i>Pyrrhura picta</i>		2	南米
			イワウロコインコ	<i>Pyrrhura rupicola</i>	1		南米
			ナナイロメキシコインコ	<i>Aratinga jandaya</i>	3		ブラジル
			コガネメキシコインコ	<i>Aratinga solstitialis</i>	2		南米
			シモフリインコ	<i>Aratinga weddellii</i>	2		南米
			テツバシメキシコインコ	<i>Aratinga aurea</i>	1		南米
			ルリコンゴウインコ	<i>Ara ararauna</i>	2	1	中央アメリカ
			コンゴウインコ	<i>Ara macao</i>	1		中央アメリカ
			ヒメコンゴウインコ	<i>Ara severa</i>	1	1	中央アメリカ
タカ科 Accipitridae	メンフクロウ科	メンフクロウ属	コミドリコンゴウインコ	<i>Ara nobilis</i>	1		南米
			ピセイインコ	<i>Psephotus haematonotus</i>		2	オーストラリア
			マキエゴシキインコ属	<i>Barnardius zonarius</i>		1	オーストラリア
			コダイマキエインコ	<i>Lathamus discolor</i>	1		オーストラリア
			オトメインコ				ニュージーランド
			アオハシインコ属	<i>Cyanoramphus novaezelandiae</i>		1	ニュージーランド
			キキョウインコ属	<i>Neophema bourkii</i>		2	オーストラリア
			ヒラウインコ属	<i>Platycercus eximius</i>		2	オーストラリア
			ヒインコ属	<i>Eos bornea</i>	1	4	インドネシア
			ゴシキセイガイインコ	<i>Trichoglossus rosenbergii</i>	1	8	インドネシア
タカ科 Accipitridae	メンフクロウ科	メンフクロウ属	セキセイインコ	<i>Melopsittacus undulatus</i>	6	5	オーストラリア
			コザクラインコ	<i>Agapornis roseicollis</i>	4	1	アフリカ
			ルリゴシボタンインコ	<i>Agapornis fischeri</i>	1	2	アフリカ
			キエリクロボタンインコ	<i>Agapornis personata</i>	1	2	アフリカ
			ボタンインコ	<i>Agapornis lilianae</i>	6	3	アフリカ
			ホンセンインコ	<i>Psittacula krameri manillensis</i>	1	1	インド半島
			オオダルマインコ	<i>Psittacula derbiana</i>	1	2	中国南部
			ダルマインコ	<i>Psittacula alexandri</i>	2		東南アジア
			モモアカノスリ	<i>Parabuteo unicinctus</i>		1	北中南アメリカ
			メンフクロウ	<i>Tyto alba</i>	1		五大陸広域

表1. つづき

目 (Order)	科 (Family)	属 (Genus)	種和名 (Species)	種 (亜種) 学名 (Species/Subspecies)	販売店数 2004 2007 2014	原産地
Strigiformes	Tyrtonidae	コノハズク属	アフリカオオコノハズク	<i>Otus leucotis</i>	1	アフリカ
	Strigidae	ヒナフクロウ属	ナンベイヒナフクロウ	<i>Ciccaba virgata</i>	1	中南米
	ハヤブサ科	ハヤブサ属	ハヤブサ属の1種	<i>Falco sp.</i>	2	南欧・アフリカ
	Falconiformes		ラナーハヤブサ	<i>Falco biarmicus</i>	1	日本・一部アジア
	スズメ目	コガラ属	ヤマガラ	<i>Poecile varius</i>	1	
	Passeriformes					
	Paridae					
	メジロ科	メジロ属	メジロ属の1種	<i>Zosterops sp.</i>	1	
	Zosteropidae		キイロメジロ・	<i>Zosterops senegalensis</i>	1	アフリカ
			アフリカヤママメジロ・	<i>Zosterops polioastrus</i>	1	アフリカ
アトリ科	カナリア属	カナリア属	カナリア	<i>Serinus canaria</i>	6	改良種
	ウソ属		ウソ	<i>Pyrrhula pyrrhula</i>	2	ユーラシア
	Fringillidae	コウギョクチョウ属	コウギョクチョウ	<i>Lagonosticta senegala</i>	1	アフリカ
	カエデチョウ科	セイキキョウ属	セイキキョウ	<i>Uraeginthus bengalus</i>	1	アフリカ
	Estrildidae		ルリガシラセイキキョウ	<i>Uraeginthus cyanocephala</i>	2	アフリカ
			トキワスズメ	<i>Uraeginthus granatina</i>	1	アフリカ
		カエデチョウ属	ホウコウチョウ	<i>Estrilda melpoda</i>	1	アフリカ
			カエデチョウ	<i>Estrilda troglodytes</i>	1	アフリカ
		ベニスズメ属	ベニスズメ	<i>Amandava amandava</i>	2	アフリカ
		アサヒスズメ属	アサヒスズメ	<i>Neochmia ruficauda</i>	1	西・東南アジア
テンニンチョウ科	キンカチョウ属	キンカチョウ属	キンカチョウ	<i>Poesphila guttata</i>	4	オーストラリア
	キンセンチョウ属	キンセンチョウ属	キンセンチョウ	<i>Chloebia gouldiae</i>	1	オーストラリア
	キンバラ属	キンバラ属	コシジロキンバラ	<i>Lonchura striata</i>	5	オーストラリア
	ブンチョウ属	ブンチョウ属	ブンチョウ	<i>Padda oryzivora</i>	6	改良種
	テンニンチョウ属	テンニンチョウ属	シロキンチョウ	<i>Vidua chalybeata</i>	4	ジャワ、バリ
	ムクドリ科	キンセンチョウ属	ホウオウジャク	<i>Vidua paradisaea</i>	1	アフリカ
		キンセンチョウ属	キンセンチョウ	<i>Gracula religiosa</i>	2	アフリカ
	Sturnidae					南・東南アジア

* アフリカ産2種のメジロ属の種名は、茂田 (2008) を用いた。